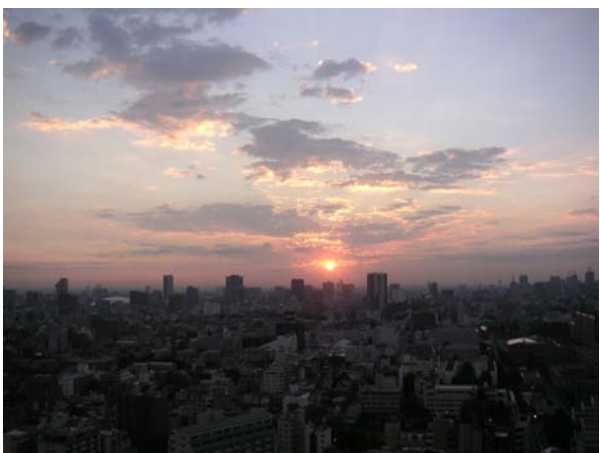


時計

以前住んでいたマンションから道路一つ隔てたところ^{へだ}に出現した高層マンション——三年ほど前に建設工事が始まった四棟のマンションと病院やスーパーマーケットなどがあるコンプレックスが完成し、その中の最高層の四十階建てマンションの二十八階の一室に入ってから三ヶ月ほど経った。

地震や火災などを考えると高い建物は危ない。なかでも高層階は逃げ場がなく危険である——この気持ちを払拭^{ふっしょく}できず、青山、麻布、白金、そして市ヶ谷と職場との関係もあつてマンションを転々としたけれど、いずれも、四、五階建ての一階か二階だった。

しかし、目の前に高層マンションが出現し、興味本位で覗^{のぞ}いたところ、その中でも高層階に転居するハメになった。眺めが圧巻だった。ただ八十メートルぐらい上がっただけなのに、まったく違う風景が広がっていた。ただ高いところから見ているだけなのに、見慣れた風物が別世界を作っていた。それを眺めていたら、いずれ高輪の菩提寺の土に埋葬されるのだし、人生で一度ぐらい思い切り高層階で生活するのも悪くはないと思った。地震や火事があったら、それはその時のことだと割り切った。



付近一帯が都心でも有数の堅固な地盤で、関東大震災でもまったく被害がなかったことを知っていたことも即断を促した。こん

なことに通じているのも大学時代、「地天研」というクラブに属し、関東地域の地質構造などを調べ回った恩恵である。ベイエリアや下町などは地盤が悪く、関東大震災クラスの地震に襲おそわれたら、建物はともかく一帯に相当の被害が出ることは間違いない。そんな場所だったら絶対に躊躇ちゅうちよしたと思う。

部屋は、新宿の夜景を堪能たんのうできる西向きか、遠くに東京湾を見る東向きのいずれかで、売り物は新宿の夜景だった。しかし、強い西日のマンションには懲こりていたので迷わず東向きの部屋を選んだ。お陰で天気良ければ、まぶしい朝日で起こされる健康的な生活になった。もちろん空気はホコリっぽくなくて綺麗きれいだし、窓を開けっ放しにしても蚊とか虫が入ってこないのも嬉しい。裸で歩き回っても気兼ねすることもない。

眺望は飽きない。天気良ければ、筑波山から房総さらには三浦半島の山々まで見える。千葉方面では、幕張の高層ビル群とか、営業を止めた巨大な人工スキー場「ザウルス」も見える。お台場だいばに移ったフジテレビの球体をつなげたような特異な形状のビルもキラキラと光って見える。



手前には後楽園のドーム球場とか回転展望レストランとタワーが目印のホテルニユーオータニや上智大学の名前のある建物などが見える。右手には、広大な緑と、その緑に囲まれた迎賓館・東宮御所、東京タワー、そして話題の東京の新名所「六本木ヒルズ」の偉容が飛び込んでくる。



新宿の高層ビル群のきらめく夜景はな
いけれど、退屈しない。赤坂生まれの「江
戸っ子」で、一時期、東京から離れたとこ
ろに住んだけれど、学校も職場もズッと
都心。だから時間的に見れば、圧倒的に都
心——それも港区、千代田区、新宿区
三区だけで過ごしてきたのだけれど、最近、
改めて新発見をするようになっていて。上
から眺めるようになって、この区域の中
も、ちよつと趣の異なる地域が「島状」に
点在していることに気が付いた。



気になると止まらない。いつものクセである。結局、上から眺めて目的地の見当を付け、スニーカーを履き、ユニクロで買ったリュックサックを背負い探索に出る。目的の地域を歩き回って得た印象と、上からの眺望で感じた印象とを重ね合わせ、時には江戸時代の古地図を引っ張り出しては、一人で合点するがってん。これが結構、面白くやみつきになった。

高層階に住むと運動不足になると言われたけれど、この調子だと杞憂きゆうのようである。現在、平均一日一時間ぐらい、ぐつしよりと汗ばむぐらい歩いている。休みの日になると二、三時間歩くことも珍しくない。効果はききんで、足のだるさとか、ほてりとか、むくみのようなもの——夜になると気になっていたものが消えてしまった。

持ち歩くのは愛用のミノルタのデジカメ——一眼レフのDimage 7と薄型コンパクトのDimage X。栄養補給のためのブドウ糖、お気に入りの「深層水」のペットボトル、それと連絡用の携帯電話ぐらいである。それに最近では機械式の自動巻腕時計も加わった。親父の唯一の形見かたみの時計である。

親父が亡くなったのは一九八九年十月で、そろそろ十四年経つ。その間、引越を繰り返すごとに親父のものを処分した。しかし、もう動かないのだけれど、親父が最後まで使っていたために、捨てられず、いずれ修理して使おうと残しておいた機械式時計があった。

ところが時計を修理してくれる店がなかなかみつからなかった。知り合いの店の親父は高齢で引退していた。それで「時計修理」などの看板を掲げている店を見かけると、入って相談したのだが、いつも「以前はやっていただけだけれど、もう歳なので出来ないで止めた」とか「お客もいないし商売にもならないので止めた。電池交換ならやるけれど」といった答えだった。

しかし、散歩を初めて間もなく、牛込柳町の商店街で、小さな現代離れた雰囲気の時計屋を見つけた。ダメもとで店に入った。入ったら直ぐに可能性を感じた。無愛想な親父が修理道具に囲まれてポツンと座っていたからだ。眼鏡越しに上目づかいでジロツと見る。逃げ出したくなかったけれど、意を決して古い機械式腕時計を修理してもらえるかどうか尋ねた。親父は無表情に費用がかかるが、それでも良いのなら引き受けるけれど、修理するより新品のクオーツを買った方が得だよとつぶやく。それでもくじけずに、親父の形見なので費用はかかっても良いから直して使いたいと言うと、とたんに相好を崩した。

翌日、動かない時計を持って再び店を訪れた。時計を見て、これは竜頭部分りゅうとうぶぶんが二重構造で内側に六角形の日付変更のためのプッシュ式のスイッチが組み込まれている特殊なヤツで交換部品はない。この方式の腕時計は、これ以外にはない。複雑な機構のもので上手く直るかななど言いながら、自分なら何とか直せるという自信をチラチラさせる。そしてたしか昭和四十四年（一九六九年）発売のものだなどと延々と蘊蓄うんちくを披露する。

さらに自分の持っているオメガの機械式腕時計を見せ、オメガだと部品がズーツと用意されており、そこが日本メーカーと違うと自慢する。ついにはテレビ番組の制作に使われるストップ・ウォッチではスイスのミネルバ製の機械式が幅を利かせており、昔は良く修理の依頼があつた。でも、フジテレビが移転し、その仕事もなくなつた。もう修理は止めたいなどと初対面の僕に愚痴ぐちまでこぼす。キリがないので、ちよつと用事があるのでと言って修理を頼んで店を出た。

時計屋の親父の話聞いて、この腕時計の由来を思い出した。僕が就職したのが昭和四十三年（一九六八年）。翌年、初めて真つ当なボーマナスをもらったとき、それをはたいて贈ったセイコーの最新鋭自動巻時計だった。親父は、毎日、ラジオの時報に合わせて時間を直しながら古い腕時計を使っていた。その親父が、悪いなど言いながら、とても喜んだ顔を思い出した。

| 製造開始年 | キャリバー名 | 製品名 | 仕様 | 振動数 | 精度等級 | 製造 |
|-------|--------|-------------------|-------------------|-----|------|----|
| 1960 | 6201 | セイコーマチック | 20石 (17,21,30石) | 5 | C | S |
| 1961 | 6601 | スポーツマチック | 17石 (19石) | 5 | . | S |
| 1962 | 6205 | マチックセルフデーター | 日付 24石 | 5 | B | S |
| 1963 | 6606 | スポーツマチックファイブ | 日付曜日付 21石 | 5 | D | S |
| | 6206 | マチックウイークデーター | 日付曜日 33石 (17,26石) | 5 | C | S |
| | 8305 | マチックスリムアート | 日付曜日 30石 | 5 | C | S |
| 1965 | 8306 | 83 マチックウイークデーター | 日付曜日 30石 | 5 | C | S |
| 1967 | 5106 | 51 マチックウイークデータ | 日付曜日 33石 | 10 | A | S |
| | 4006 | ビジネスベル | 日付曜日 27石 (17,21石) | 5 | C | S |
| | 5126 | 51 セイコーファイブ (DX) | 23石 | 5.5 | . | D |
| | 5139 | 51 セイコーファイブ | 27石 | 5.5 | . | D |
| | 6106 | 61 ファイブデラックス | 日付曜日 25石 (17,23石) | 5 | C | S |
| 1969 | 5606 | 56 ロードマチックウイークデータ | 日付曜日 23石 | 6 | C | . |
| | 6117 | 161 ワールドタイム | 日付 24針 17石 | 6 | C | S |
| | 6159 | 61 マチック | 日付 25石 | 10 | B | S |
| | 6159 | ダイバー(1975) | 日付 25石 | 10 | B | S |
| | 5626 | キングセイコーウイークデーター | 日付曜日 25石 | 8 | A | S |
| 1969 | 5146 | プレスマチックウイークデーター | 日付曜日 27石 (31石) | 8 | C | D |
| | 7019 | 70 ファイブアクタス | 21石 | 6 | D | D |

「製造会社」の項のDは旧第二精工舎(亀戸工場)、Sは旧諏訪精工舎

振動数とは、テンプの振幅数。例えば、1秒間にテンプが5回振動する機械は、5振動という。一般に8振動以上の振動数の時計は一般に「ハイビート」と呼ぶ。

機械式時計のセイコー社内精度等級表 (1968年12月当時のもの)

| 紳士用 | A | B | C | D | E | F |
|---------|----|-----|-----|---------|---------|----------|
| 精度の規格 + | +9 | +15 | +25 | +35 +45 | +45 +55 | +80 -120 |
| - | -6 | -10 | -15 | -20 -25 | -35 -35 | -40 -60 |

聞いたもので、改めて、このセイコー・プレスマティック・ハイビートという腕時計に興味を覚えた。時計マニアの人は多いのだから、インターネット上に何か情報があるだろうと検索を行った。数は多くはなかったけれど、関連の情報はいくつか集まった。



給料が二万円に満たないときで、たしか給料と同じぐらいの値段だったように思う。親父は、それ以来、三十年あまり使っていたのかと、修理が終わった、正確な時を刻むようになった時計を腕にして感慨に耽った。

時計屋の親父の言葉を

セイコー発売の時計の仕様一覧が載っているホームページがあった。その中から一九六九年までに発売された自動巻式のもの選んだのが前の表である。「キャリバー」とは心臓部のムーブメントのこと。この表にある時計は、いずれも機械式で、いわゆるクォーツが出てくるのは、この数年後のことである。この表を見て、改めて当時としては最新式のことを気張って親父にプレゼントしたことを実感した。

(<http://www.lev.ne.jp/~yazawa/watch/watch.htm>)

しかし、何故かマニアの間では人気がなく「骨董品」としての価値はないらしい。

「リュウズが二重になっていて中側を押し込むと日付が進むようになっていました。私の知識では、他でこの構造は見たことがありません。HI-BEATはGSやKSと同じで、とても正確です。しかも日付曜日は0時ジャストに替わります。なぜこの時計が高級時計の仲間入りしないのか……私が思うに名前が悪いのでしょうか。クイーンセイコー（女性用じゃない？）とかセイコープレジデントなんて名前が初めから付いていたら確実に万円クラスの性能です」と、マニアの「私の時計店」(<http://www.ocn.nifty.jp/inafuku/toppow/myclock.htm>)に写真付きで紹介されていた。それでもオークションなどを見ると、もちろん状態によるのだろうけれど、三万円ぐらいで取引されているようである。

これに比べると、たしかに時計屋の親父が言っていたスイスのミネルバ製の機械式ストップ・ウォッチの人気は高そうである。インターネット上にも情報が氾濫している。



ミネルバは一八五八年創業の伝統的なスイスの機械時計メーカー。現在でも昔と変わらない自社生産体制を堅持。自社ムーブメントを製造するスイスでも数少

ないメーカーだという。第二次世界大戦中、軍用時計製造で定評を獲得し、戦後、高精度の腕時計、クロノグラフ、ストップ・ウォッチの製造に乗り出す。とくに独特のコイルバネを使用したストップ・ウォッチやクロノグラフは多くの時計愛好家の支持を得て、アンティーク・ウォッチ市場では人気のブランドである———だいたい、こんな内容のことがあちらこちらに書かれていた。

もつとも二〇〇〇年末、ミネルバ社はマネーゲームの対象となり、イタリア人に買収され、社長以下優秀な技術者も辞めてしまい、今後は、これまでのような良心的な時計生産は絶望的だろうという見方がされている。どこの国も事情は同じようである。

ところで、自動巻とは言っても機械式時計は世話がかかる。「少なくとも一日八時間は腕にしていないと止まるよ。多分、それでも少し巻きたさないと駄目だよ」と、時計屋の親父は動き出したプレスマチックを手渡しながら言ったけれど、その通りだった。気が付いたら止まっていた。時計のネジを巻くという行為を忘れていたことに気が付いた。しかし、最近、ようやく昔の習慣を取り戻し、ネジを巻くことが再び生活の一部になりつつある。



それと、その機械式腕時計を着けての散歩とで日常生活に一定のリズムが生まれるようになっていく。

先日の休日には、時計を見て、もう一時間ぐらい歩こうと決めたら、赤坂の檜町公園ひのきというところに辿り着いた。迎賓館げいひんかんから豊川稲荷へ抜け、赤坂市役所から乃木坂とよかわいなりに出たところで、再び裏道から六本木へ抜けようとしたところにあった。

こんなところに公園があるとは知らなかった。沿革を説明した看板があった。元は毛利氏の中屋敷で、邸内に檜が多く「檜屋敷」と呼ばれ、それが町名の由来だという。明治四年（一八六一年）に国の管理地となり、明治七年（一八七四年）歩兵連隊の駐屯地となり、戦後は一時米軍に接収され、防衛庁の設置の後、この部分は昭和三十八年（一九六三年）に都立公園なったなどと書かれていた。

これを読んで、直ちに、ここが親父の所属していた麻布六連隊の駐屯地だった場所だとわかった。僕の誕生の地（本籍）は近いし、そこと麻布六連隊にまつわる話などを聞いていたからだ。周囲の地図を眺めても話の通りだった。

上海事変でほとんど全滅した麻布六連隊。肩から背中にかけて貫通銃創を受けながらも奇跡的に命をとりとめ、生還した親父。もし親父が、そこで戦死していれば、僕は、この世にいなかった。公園のベンチで汗を拭き、ペットボトルの水を飲みながら、不思議な巡り合わせに驚いた。これも親父の時計を使うようになったからなのかと思った。



公園には池があり、二十人あまりの人が釣りをやっている。のどかな昼下がりである。とても都心にいるとは思えない。しかし、見上げると、「六本木ヒルズ」が木立の合間に聳えていた。それで都心の、それも六本木の繁華街に近いところに居ることに気が付いた。

（二〇〇三年夏 伴友貴）